

# 小池辰雄記念図書室だより

2015. 12. 28(月) NO.28

千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

## 1. 2015年度の読書会と図書室

石丸厚子（図書室）

2015年度の読書会も多くの方が与えられ、素晴らしい会となりましたこと、感謝申し上げます。特に都賀では「無者キリスト」を読了して、11月から「聖書の人ルター」を読み始めています。1月～12月平均50名ほどの方々が参加して下さい、美味しいお菓子とお茶を楽しみながら読書会を楽しんで頂けたと思っています。

また図書室におきましても、多くの来館者が遠くから、近くから来て下さり、学び、勉強、読書、思索、相談とご利用いただけましたこと、ありがとうございました。

来年度もより多くの方にこの図書室を利用して頂きたいと願っています。神様の御旨にかなった図書室となりますようにと、この一点に集中して2016年度も進んでいきたいと思っています。皆様のご来室を、心からお待ち申し上げております。

## 2. 図書室の温室とガラスケース（図書室探訪）

エレベーターを降りた所の空間は、南に面しており、冬でも日差しのある時には、ポカポカと暖かい空間となっております。温室のようなこの場所に皆さんからいただいた花々が冬の今でも美しい花を咲かせて、皆さんをお迎えしています。目にも麗しく心も潤います。嬉しい限りです。



このガラスケースには小池先生の愛用の品々が展示されています。中にある石膏のマスクは小池先生が召天された時のものです。20年の歳月を経て、ご自身の記念図書室に落ち着かれました。穏やかなお顔です。

### 小池辰雄を読む会

#### ●余市

2016年1月1日（金）13：30～15：00  
2016年2月21日（日）13：30～15：00  
余市郡余市町豊丘町 370-9 惠泉祈りの家  
\*会費：無料（自由献金）  
\*連絡先：0135-23-9222（木下）

#### ●札幌

2016年1月2日（土）13：30～16：00  
2016年2月27日（土）13：30～16：00  
（札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家）  
\*会費：無料（自由献金）  
\*連絡先：011-571-2348（浅井）

#### ●都賀

2016年1月9日（土）10：00～12：00  
2016年2月6日（土）10：00～12：00  
千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階  
\*会費：1000円  
\*連絡先：043-235-3815（石丸）  
\*準備のため、出席のご連絡をお願いします。  
\*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。

図書室便りは隔月発行です。

## 異言をめぐって 其二

川口愛子さんは、明治43(1910)年生まれ、この年(昭和26年)40歳になっていた。女学校を卒業するころ脊椎カリエスを発病、塚本先生に導かれて信仰生活に入り、以来闘病、治癒、再発を繰り返し、二時間寝て二時間起きるような状態が続いていたのだが、小池辰雄の祈りによって脊椎カリエスが治ったといわれた。

この時期の小池辰雄とそれを取り巻く人々の雰囲気については、私もよく覚えている。

「祈れば治る」と、風邪を引いて寝ている私の額に手をおいてよく按摩してくれた。自信に満ちた父親の手が額に当てられるとそれだけで気持ちよく、そのまま眠りに落ちて翌日は熱も引いていたりした。だから、徹夜祈祷会の後で、足の悪い人が歩いて帰れるようになったり、眼が見えるようになったという話をよく聞かされ、辰雄はそれを「神様の霊の力である」といつていた。

そういった風潮は、いつのまにか「本当に祈り入れば異言が出る」「神の霊にぶっ倒されないような祈りは本物じゃない」ということになり、あたかも「神様の霊の力」によってあらゆる病を治せるという雰囲気が蔓延するようになったのだと思う。

そんな中での川口さんの脊椎カリエス治癒という出来事だったが、川口さん自身、単純に霊的な力によって脊椎カリエスが治ったと喜んでいただけではなく、初めは小池が異言を発した時に「おかしさがこみあげ」てきたこと、異言や神癒に対して怖れと不安を持ち、むしろ警戒して冷静さを失わないようにしていた、そののちの異言と神癒の体験であったと告白している。

喜び勇んで投函した手紙に、塚本先生からの返事はなかった。彼女は、塚本先生の怒りに触れたのではないかと不安になった。というのも、塚本先生は、「(異言や神癒)だけを特に優れた信仰と考えたり、また狂信的となり得る危険性をもってあるから注意を要する」と書いていたからでもある。(雑誌『聖書知識』前年十一月号の巻頭言)。

「先生の弟子でありながら先生のいまだかつて体験されない世界へきてしまわねばならなかった事」、しかしそれは「一時の興奮で得たことではない」、「この身と霊に印された神の御業だけはどうぞ致すこともできない」という確信であったが、一方で、もしかしたら「先生を失うこと」になるのではないかと不安におびえた。

そうした一ヶ月後の二月一日、恐れていた塚本先生からの手紙が来た。それを読んで彼女は、「私の霊はゲッセマネにゆきました。腸も胸もゾタゾタにさかれる痛みの一晩でございました。恩師の御反対をハッキリ知りたてまつった上でもなお自分はこの路を正しいと信じて進みぬか」、それは「耐えがたい苦悩



「野の草を採集する川口愛子(右から3人目)さんたち」

の道」であると悩みぬく。塚本先生が異言、神癒騒ぎを苦々しく

思っていたことは明白であった。

「端的に言えば、私は異言を好まない。(略)この異言で信仰が進むとか、神やキリストと直接かつ親しく交わることが出来るという。これを何か特に尊いもののように考え、人に伝えようとする。(略)これは他の宗教にもある現象であって、果たしてそれが真の霊の賜物であるか否かは本人にもわからない」(雑誌『聖書知識』「異言と愛」昭和26年2月号)とコリント前書12章を引いて異言を「道徳的信仰的価値の少ないもの」とし、「祈で病気がなほることが何であろう。(略)子供の頃、私の村に染吉という男がゐた。祈祷で病気をなほすので一時九州全体から参詣者があつた。私も『一寸八分の家の文殊様!』と言って息をふきかけられ、即座にはしかがなほったことを覚えてゐる。(略)君はアスピリンで熱が下がったからとて、五十何円もの切手を貼って私に報告するだろうか。そもそも祈祷で病気をなほさうなどと思ひ立ったことが可笑しい」(同)と神癒を一蹴し、「これ位のことに大騒ぎするようでは、まだ信仰が解かっているのではないかと淋しく思う」(同)と慨嘆した。

私は、異言・神癒を認めない師と霊的体験をした弟子の信仰を巡る対立は果たしてどうなるのか—そんなことを思いながらこの書簡を読んでいき、その後の意外な展開にびっくりした。

川口さんは師の異言・神癒批判に次のひと言で応えたのである。「先生、私は先生にお従い申し上げます」そう言い切ったのであった。「奇しき体験の日から四十五日、日と共にその感激も力もうすれゆきましたからではございません。否事実はその正反対でございます」という彼女は「先生に従い申し上げます」と言って、この時塚本先生を超えて行ってしまったのである。

手紙を受けた塚本先生はすぐ速達はがきを送った。「多分貴女の生涯に於いて最も困難な試練に堪えられたことを、貴女の為に喜び、神に感謝します」その葉書には先生の一滴の涙の跡が滲んでいたという。

それは、川口愛子さんが奇しき体験でたまわったものは、文字通り「神の愛」であり、その愛で塚本先生に向き合ったのだと、今ならはっきり分かる。それが無条件に塚本先生を打った。

この翌年、小池辰雄は「清瀬事件」で八王子の裁判所から召喚されるが、本項で言いたかったことは、辰雄が一連の出来事の問題を乗り越えていく大きな力となったのが、まちががなく川口愛子さんという愛の人の存在であったろうということであった。